

ムハンマド・イミン・ボグラと『東トルキスタン史』を語る

— 娘婿ユヌス・ボグラ、娘ファティマ・ボグラの口述 —

水谷 尚子

はじめに

2006年9月、トルコ・イスタンブルに事務所を構えるウイグル人組織「東トルキスタン基金会」会長リザ・ベキン（以下敬称略）の紹介で、筆者は、1965年にアンカラで死去したウイグル人民族主義者ムハンマド・イミン・ボグラの一人娘であるファティマ・ボグラの御宅を訪問する機会を得た。周知のように、ムハンマド・イミン・ボグラは、1930～40年代に活躍したウイグル人政治指導者の代表的人物の一人で、1933年11月に設立された東トルキスタン・イスラーム共和国において、公式の役職はなかったものの最も有力な指導者とフォーヴズにより推測されている⁽¹⁾。そしてナショナリストとしての彼の最大の功績は、祖国とみなされた東トルキスタンの通史となる『東トルキスタン史 (Sarqī Turkistān Tārikhi)』を著したことであろう。

イスタンブルから古都イズミルへ国内線で飛び、空港からバスとタクシーを乗り継いで約1時間半。総合病院や療養施設のある海辺の村の閑静な一軒家に、老夫婦は住んでいた。ムハンマド・イミンは生涯に二度結婚し、ファティマは最初の妻の子で、実子はファティマただ一人。後妻との間に子はなかった⁽²⁾。ファティマには娘が二人おり、長女はトルコの国務院に勤務し退職後イスタンブル在住、次女はイズミルのボスポラス大学に勤務している。「歳をとって子供の近くに居たくなかったから、長年住み慣れた首都アンカラを離れ、3ヶ月前イズミルに引っ越してきた」という。

訪問の目的は、ムハンマド・イミン・ボグラの生涯と、彼が記した『東トルキスタン史』

⁽¹⁾ Andrew D.W.Forbes, *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia : a political history of Republican Sinkiang 1911-1949*, Cambridge University Press, 1986, p.114.

⁽²⁾ ファティマによると、「実母と父が離婚したのは1949年中国を離れる前で、同時期に父は継母と結婚した。実母はホタンに残り1960年代に死亡。私は、父と継母とともに亡命の道を選び、トルコでは私の家族と父・継母が一緒の家で暮らした。」ファティマの継母はリザ・ベキンの妹である。

についての口述記録収集であった。『東トルキスタン史』はウイグル人の近現代史を研究するテキストとして突出した史料価値をもっており、東トルキスタンの民族主義者の歴史観を系統的かつ鋭利に歴史叙述上に表象化させた内容だ⁽³⁾と評価される一方で、日本ではムハンマド・イミンに関して詳細に言及した学術研究や一般書籍は存在せず⁽⁴⁾、同書についてもその複雑な発行・再版の経緯は分かっていなかった。最近になってイスラーム地域研究東京大学拠点HPに、2007年夏にファティマ宅を訪問した清水由里子の調査報告が掲載され、同著の出版経緯の一端が紹介されるに至った⁽⁵⁾。

筆者は、ニューヨークタイムズの記者フランク・ロバートソンがウルムチで1948年に撮影したムハンマド・イミンの肖像写真が掲げられたリビングで、『東トルキスタン史』のオリジナルテキストを見せて頂いた。本人の手書原稿は、分厚い緑色の表紙のノートに、細かい字で約800頁に渡って万年筆で記されていた。残念ながら冒頭近くから約50頁分が紛失しているものの、その他の部分の保存状態は良好である。所々に赤字での訂正や、色の違うインクでの書き足しがあり、何年にも渡って草稿した跡が窺われた。

聞き取りに応じてくれたのは、主にファティマの夫、ユヌス・ボグラであった。ユヌスとファティマとはもともと遠い親戚で、幼馴染み同士。ユヌスの父は、1933年の革命に参加したムハンマド・イミンの同志だった。「義父には幼年時代からまるで養子のように扱われ、実の父のような存在だった。義父から聞き及んだ話は妻と同じであり、義父と暮らした時間はファティマよりも長いから⁽⁶⁾、彼の政治活動については妻より知っている」。

両氏への聞き取りはトルコ語から漢語への逐次通訳で、簡単な質問事項については英語で行った。

1. ファティマ・ボグラの口述

1933年ホタンで生まれた。子供の頃は戦争ばかりで、父とは13年間離ればなれに暮らした。トルコに来るまで、生命や家計の維持が保証される穏やかな生活をした事がなく、学校

⁽³⁾ 新永康「ウイグル人民族主義者エイサ・ユスブ・アルプテキンの軌跡」『現代中国の構造変動7』(2001年、東京大学出版会)、155頁。

⁽⁴⁾ トルコ語では次のような研究書がある：Abdullah Bakir, *Doğu Türkistan milli istiklal hareketi ve Mehmet Emin Buğra*, ISBN975-00589-0-9, İstanbul, 2005.

⁽⁵⁾ イスラーム地域研究東京大学拠点HPより(最終閲覧日：2008年2月26日)
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/centraleurasia/report/2007/shimizu/index.htm>

⁽⁶⁾ ユヌスがムハンマド・イミンと行動を共にしていたのは、幼少期を除くと、1936年から1942年までのアフガニスタン・インド滞在時期、及び二度目に国外脱出を図った1949年からトルコに亡命して死亡する1965年までの期間である。

へはトルコに亡命する前にインドのニューデリーで少し通っただけ。読み書きは家庭教師から習った。

1945年、父が重慶からウルムチに戻ると、ホタンに残っていた母や私も、ウルムチで生活するようになった。父はそれから1949年まで、ホタンなど各地とウルムチを往復する毎日だった。

中華民国が崩壊し、中国共産党が東トルキスタンに侵攻した1949年、父と共にインド領カシミールに逃れ、そこで1952年に夫ユヌス・ボグラと結婚した。1953年にトルコへ亡命してから現在まで、ずっと家庭の主婦で、私や2人の娘は一切の政治運動に参加していない。少女時代に私は学校で学ぶ機会がなかったから、娘にはちゃんと高等教育を受けさせること、家庭を守ることを考えて生きてきた。

ホタンには、父の姉が1990年まで生きていた。伯母の息子アブドル・バラット・メフドム⁽⁷⁾は、ムハンマド・イミンの親戚だとの理由で、政治犯として15年間も牢に入っていた。現在70歳を越えるというのに、3年ほど前に再び政治犯として捕まって、今度は5年の刑期を言い渡された。新疆の親戚を思ったら心が痛む。

父は温厚で賢い人だった。

2. ユヌス・ボグラの口述

(1) 私自身について

1929年ホタン生まれ。

私が生まれて間もなくホタンの革命に参加した父アブドゥケリムは、蜂起の失敗で逮捕された。1936年に釈放されると、アフガニスタンの首都カーブルへ一家で逃れ、その後、比較的生活しやすいインド領カシミールに移転した。小中学校の初等教育を受けたのは、アフガニスタンとインドだった。

1946年インドから帰国しホタンに戻ると、ムハンマド・イミンにウルムチへ呼び出され、彼の希望で1948年から2年間、南京の中央大学で漢語の勉強をした。残念ながら漢語はすっかり忘れてしまった。この頃、国民党の政府官僚や軍人たちは、続々と台湾に逃亡しており、

⁽⁷⁾ 1930年カラカシ生まれ。カシュガルでイスラーム学を学び、ホタンで宗教教育に長く携わる。政治犯として投獄されたのは4回。1958年に逮捕され、1974年刑期満了で労働改造所を出る。1979年再逮捕されるが、1年後に釈放。2001年には息子アブドゥラフ・バラットとともに逮捕され2年間獄中にいたが、「人前で宗教の話をしない。イマームの役をしない」などの条件で保釈、自宅軟禁となる。2004年1月2日ホタンの民家で、子供たちにイスラームの教えを説いているところに公安が踏み込み、生徒7人と家主とともに拘束された。

「我々と共に台湾に行かないか」との打診もあったけれど、私は故郷に帰る道を選び、南京の国民党政権が倒れる2～3日前に、ウルムチに飛行機で戻った。

私の父は1947年にカシミールから新疆へ戻ったが、1949年には国外脱出をせず、毛沢東時代に監獄で死んだ。

中華人民共和国建国前の1949年9月頃、私はカシュガルからカルグルクを経て、ムハンマド・イミンより早く出発してインドに逃れた。インド領カシミールには約3千～5千人の東トルキスタン難民がおり、義父は難民を飢えと寒さから救うために尽力した。ファティマと結婚した翌年の1953年に、インドの首都ニューデリーへ行き、義父の仕事を手伝ううちに、コムルの蜂起をおこした人で後に台湾に渡ったヨルワス（ヨルバルス）など、東トルキスタンの指導者だった様々な人と知り合った。私は生活のためインドで機械修理を少し学び、ラジオなどの修理やミシン縫製の仕事などで現金収入を得て、家族を養った。

1953年にトルコが私たちの政治亡命を受け入れてくれ、列車などを乗り継いでイスタンブルへ向かった。私の方が先にトルコに到着し、その約1ヶ月後にムハンマド・イミンが飛行機で来た。ちょうど子供が生まれて40日目ぐらいだった。

トルコ政府がウイグル人亡命者に与えたカイセリの村に、私たち一家は住まなかった。トルコ政府は「土地は提供するから、生計は自分で立てなさい」との事だったので、村は農業従事者ばかりで、知的労働の仕事はなかった。商売をしたい者はイスタンブルへ、知的労働をしたい者はアンカラに住むようになった。私は1954年にアンカラで映画制作会社の翻訳の仕事を見つけ、何年か勤めた後、国の翻訳局で英語・ヒンディー語・ペルシャ語・ウルドゥー語などの翻訳家として勤務するようになった。その傍ら小説などの翻訳もした。私たちは流浪の日々を生き抜くために、多くの言語を覚えざるを得なかった。それが身を助けた。インドで覚えた英語が、トルコに来てから最も役に立った。

(2) 義父を語る⁽⁶⁾

義父のムハンマド・イミン・ボグラは、1901年ホタン生まれ。ホタンで名の知れた宗教家だった義父の父、ファリディン・ハジは、ムハンマド・イミンが幼い頃に死亡したので、義父は母の手で育てられた。兄弟姉妹は彼を入れて4人だった⁽⁹⁾。

⁽⁷⁾ ムハンマド・イミン・ボグラには、誕生から1949年の亡命までの半生を記した執筆年不明のウイグル語未発表稿 *Siyasi Hayatim* (私の政治人生) があり、原稿はユヌス所蔵。イスタンブルでウイグル語書籍を編集・出版しているホタン人アブドゥジェリル・トゥランのHP (<http://www.uyghurweb.net/>) (最終閲覧日: 2008年2月26日) に現代ウイグル語表記に改変した文章が掲載されている。

⁽⁸⁾ 姉・本人・弟2人の4人。

21歳の時、ホタン及びカラカシにあるマドラサを優秀な成績で終え、1922年から1933年の間は、ホタン及びカラカシでマドラサの教員を勤めた。教員時代、ホタンとインドやサウジなど国外を行き来していた商人から、外国の新聞雑誌や書籍を手に入れて、熱心に読んだ。彼の伯父さんも貿易商で、こうした外国事情を知る人々と会っては、国際政治情勢の情報収集をしていたらしい。

カラカシのマドラサでは、東トルキスタンを解放する方法について若い学生と盛んに議論した。1930年半年がかりで東トルキスタンの主要都市を周り、各地に於ける漢人政権の統治力や民衆の状況を自らの目で確かめ、この調査旅行を通じて「我々が解放されるには、武装革命以外に方法はない」との結論を出した。それを実行に移すため、1930年終わり頃、ホタンで秘密組織「民族革命協会」を結成し、彼は協会のリーダーとなった。

1933年2月にカラカシで民族革命が始まると、1934年に彼の弟2人は戦死。革命闘争は破れ、ムハンマド・イミンはインドに逃れた。

1935年から、義父は身の安全のため商人を装い「アブドゥラハン・ヤルキャンディ」という偽名を使い、インド領カシミールとアフガンの国境地帯に、志あるウイグル人青年を集め、ボルギルという山地を拠点に軍事訓練し、いつの日か国に帰って祖国解放運動を続けようと活動を始めた。しかし、運動は困難を極めた。アフガン国境近くに住むワハン部族に100万両の銀を支払って購入したはずの武器や物資は、とうとう届かなかった。武器と1000人の騎馬を用意してもらうとの契約だったが、裏切られたのだ。当時イギリスはインドで活発化していた反植民地気運・民族独立運動を警戒し、さらにアフガン政府はロシアにもイギリスにも曖昧な立場をとることで独立を保っていた。だから義父の政治活動は、両国にとって迷惑だったに違いない。結局、1年に渡って続けた国境付近の活動を停止せざるを得なかった。それから1942年まで、義父は一切の政治活動を許されない難民として、カーブルで生活した。『東トルキスタン史』が書かれたのは、この失意の日々だった。同著は執筆から半世紀以上を経た今日でも、中国共産党政権は禁書として新疆での出版を許していない。ウイグル人の民族意識高揚を警戒し、政権に対する脅威とみなしているのだろう。

「運動家の中に知識人がほとんどいなかったのが、民族革命失敗の原因の一つだ」と考えた義父は、武装訓練のためにやって来た若者たちを、アフガンで学校に入れたり、さらに一部の優秀な人材をトルコの軍事学校に留学させたりした。

彼は1937年に詩集を1冊、書いている。義父はアラビア語やペルシャ語に堪能で、マドラサで教鞭を執っていた頃からウイグル語のみならず、外国語でよく詩を書いていた。

当時、私は父と義父とともにカーブルで一緒に生活していたが、あの頃は本当に苦しかつ

た⁽¹⁰⁾。貧困のため暖をとる燃料もなく、凍死しそうで家具を解体して薪にしたこともある。そんなある日、家に薪や食糧が届けられた。それは駐アフガニスタン日本大使館の日本人からの差し入れだった。大使館員は義父から東トルキスタンの情勢の聞き取りをしていた。当時の日本軍部は満州・蒙古を支配して迂回し、東トルキスタンと組んで外側から中華民国政府を囲い討ちしたいと考えていたようだ。アフガニスタンの日本大使館は諜報連絡業務もこなっており、日本人は大々的に現地調査をしたかったのかもしれない。だが義父は、日本人のその構想は非現実的だと考え、訪日の誘いもあったけれど断わった。

第二次世界大戦が始まると、世界情勢の変化から義父は、今なら中国と対話を始めても構わないと考えるに至った。

1940年「中国ムスリム友好協会」指導者の身分でアフガンを訪問していたエイサ・ユスブ・アルプテキン⁽¹¹⁾に、義父は会いに行った。2人は中国にどう対処すべきか議論し、意見の一致を見たようだ。義父の日記にはこう書かれていた。「私はエイサに頼んで、蒋介石など中華民国の要人宛に手紙を送った。しばらく経って中国から返信があり、『アフガンからインドに行って、そこを拠点に中国と西トルキスタンとの共存利益追求のための橋渡しの役割をしてほしい』との内容だった」

1942年3月義父と父は、インドで第二次大戦の結果をみようと、アフガニスタンからインドのペシャワール（現パキスタン領）へ行った。入国して2ヶ月ぐらいで2人とも現地警察に捕まり、ペシャワール中央監獄に放り込まれた。6ヶ月もの間、英国人の監視下に置かれ、日本との関係などを尋問された。その間、カルカッタにある中国の領事館から、「インド滞在を許さない。中国に帰れ」と何度も連絡が来た。1943年1月8日、中国に戻ることを約束して、獄から解放された⁽¹²⁾。

⁽¹⁰⁾ *Siyasi Hayatim* には「アフガニスタン国境警備兵に見つかり、自身の状況をアフガン政府に報告すると、同国外務省からカーブルに来て良いとの許可があり、1934年9月2日に到着。外務大臣や首相とも会見し、対応は良かった」「(アフガン滞在中) 生活は何一つ困ることなく充実していた」とあり、ユヌス・ボグラ証言と矛盾する。ユヌスは一緒に滞在していたので、当時について間違った回想をするとは考えにくい。体面上このような表記をした事が考えられるとともに、貧困の中で『東トルキスタン史』を執筆したのならば、参考とした大量の書籍はどこで閲覧したり購入したのか。疑問は尽きない。のちの取材でユヌスは「義父はカーブルのトルコ大使館員と関係がよく、彼らに書籍を融通して貰っていたようで、古代史部分の多くはトルコ語の歴史書を参考にしている」と語った。

⁽¹¹⁾ 姉・本人・弟2人の4人。エイサ（1901-1995）も当時の代表的なウイグル民族主義者の1人で、中華民国国民政府官僚。詳細については（注3）を参照。*Siyasi Hayatim* には「エイサがカーブルにきたのは1939年11月2日」とある。

⁽¹²⁾ *Siyasi Hayatim* によると、インド到着後、一行は先にカルカッタの中華民国領事館に赴き、中国領事と会っている。その後ペシャワールに戻ってから逮捕された。ホタンにいた妻がエイサに連絡をとり、カルカッタ中国総領事が身元引受人となるようにとの蒋介石の打電で、インド警察から直接中国領事に身柄が引き渡され、釈放が許された。

1943年4月から1945年秋まで、エイサやマスウード・サブリ、カーディル、イスマイルらとともに、中国戦時臨時首都・重慶で暮らした。漢人政治家と対話して「新疆問題」を論じ、現地の新聞雑誌を通じて東トルキスタンを宣伝した。1944年10月12日『大公報』に「新疆ではなく東トルキスタンだ」「東トルキスタンの国民はテュルク人である」と題する記事を執筆すると、同じ新聞で漢人民族主義者の歴史家黎東方⁽¹³⁾が「東トルキスタンは中国の一部だ」と主張し、やがて論戦に発展した⁽¹⁴⁾。結果として、孫文の子・孫科を始めウイグル人に同情や理解を示す漢人たちが誕生するに至った。

1943年に中国の憲法を作るための会議が開かれると⁽¹⁵⁾、義父は仲間と共に「東トルキスタン問題」への配慮を提案する意見書、つまり「新疆という呼称を使わないでトルキスタンに訂正すべきだ」や、「トルキスタンの民は、中華民族ではなくトルコ人だと、明確に記載すべき」⁽¹⁶⁾との考えを、会議宛に送った。

日中戦争が終結し、義父が東トルキスタンに戻ったのは、1945年10月(24日)だった。エイサやマスウードと雑誌『アルタイ』⁽¹⁷⁾、新聞『エルク』を刊行し、記事で中華民国の新疆統治を批判した。また、義父は「東トルキスタン民族主義者党」の結成を計画し、準備を始めていたが、ロシア領事館や中国政府から反発をうけ、活動には至らなかった。この一件から、中国政府の特務に監視されるようになった。ホタンのケリヤを訪問したとき、彼を歓迎する一般市民に向かって、中国警察が何発も銃を撃って7人の死者を出した。狙われたのはムハンマド・イミンだったが、彼にはあたらなかった⁽¹⁸⁾。

1946年新疆省政府ができ⁽¹⁹⁾、ムハンマド・イミンは政府メンバーに入り、『エルク』編集長、ウイグル協会主席、ウルムチ師範大の歴史学の準教授など多くの仕事を兼任した。そして1948年12月29日には、省政府副主席となった。

⁽¹³⁾ 黎東方(1907-死亡年不明)は河南省出身、パリ大学卒業の中国古代史学者。国民政府教育部及び国立編訳館に勤務。戦後アメリカで大学教授を務め、その後台湾に渡り、中国文化大学史学研究所の教授となる。

⁽¹⁴⁾ この論争は、厳密に言うところでは言われているものとややズレがあり、歴史上ウイグル、カザフなど新疆在住民族をテュルクという一つの民族として見るかどうかが主な争点であったと考えられる。

⁽¹⁵⁾ この会議の委員長が孫科で、エイサ等は孫文の「三民主義」思想を有効に利用したようだ。

⁽¹⁶⁾ プラト・カディリによれば、彼らの要求には、「中華民族ではなく」との文言は存在しない(Pulāt Qadiri, *Ölkä Tārīkhi*, p.152)。

⁽¹⁷⁾ 雑誌『アルタイ』はムハンマド・イミンが重慶に来る前、既にエイサが第1号を発行。ムハンマド・イミンが編集長となるのは第2号からで、その後漢語版も刊行された。

⁽¹⁸⁾ ムハンマド・イミンは、国民政府がウイグル民族主義者を極度に警戒するようになった原因の一端は張治中にあると考えており、「張は内部資料として『こんちの新疆問題及び我々の態度』というレポートを中央に送っていた」と、*Siyasi Hayatim*では張への不信を随所に述べている。張治中(1890-1969)は国民党の軍人で、1949年中国共産党側に寝返り「新疆和平解放」に努めた。

⁽¹⁹⁾ グルジャを首都として1944年に建国された東トルキスタン共和国側と、中華民国政府側との和平協約締結によって、いわゆる新疆省連合政府が誕生した。

中国共産党の軍隊が新疆に侵攻するより前、家族や同志と共にインド領カシミールへ脱出⁽²⁰⁾。彼の2回目の亡命生活が始まった。チベットの西方には、数百人にのぼるウイグル人が中国からインドへ逃げようとして、背後から追いかけてきた中国軍と、国境の先のインド警察から挟まれた状態になっていた。このように何もかもを失った何千人もの難民の、人命維持に関わる諸問題を解決することが、政治リーダーだった彼に求められた。カシミールの地元政府関係者やインド政府・同国外務省関係者、アメリカやトルコなど各国の大使館員、国連職員と連絡を取って、救援や援助を仰ぐ時、必要に応じて「東トルキスタン民族主義者党のトップ」「国民政府の官僚」「亡命者代表」と名義を使い分けた。彼がエイサと共に尽力した結果、インド政府は難民の一時滞在を許可し、生活できる環境を作ってくれた。

1952年3月13日、トルコ国会は東トルキスタン難民1850人を、移民として受け入れると決議採択した。1949年から1952年の間には、サウジアラビアなどが難民の受入を許可してくれた。

1952年トルコに政治亡命し、1955年にトルコ国籍を取得した。

トルコ軍が朝鮮戦争に参加するなど冷戦がピークだったこの時期、ムハンマド・イミンは、ソ連や中国の共産主義と抵抗するにはテュルク系民族の団結が必要だと主張し、アゼルバイジャン・カフカスなどの各民族代表と会って「トルコ連盟」を作った。また、1952年から「世界イスラーム協会」の東トルキスタン代表になり、同組織がアラブ世界で主宰した会議に参加し、メッカ、バグダード、カラチ、テヘラン、カイロの各都市で、「東トルキスタン問題」を宣伝した。「解放ラジオ」「ヴォイス・オブ・アメリカ」の番組にも出演し、トルコ語、アラビア語、ペルシャ語でスピーチした。

1952年にイスタンブルで『東トルキスタンの歴史、地理及び現状』（トルコ語）を出版。

1953年イスタンブルで月刊誌『トルキスタン』（トルコ語）を発行。

1954年イスタンブルで『東トルキスタンの独立運動及び中国の政策』（トルコ語）を出版。この本は後に英語訳された。同書には台湾の中華民国政府官僚・鄒家華との対話が含まれている。

1956年にトルコ語と英語で雑誌『トルキスタンの声』を発行した。

ムハンマド・イミンが死亡したのは1965年6月14日。昼頃アンカラの自宅で心臓病発作に見舞われ、そのまま帰らぬ人となった。葬儀は国葬級で行われ、棺はトルコと東トルキスタンの国旗で覆われ、アンカラにあるアッセリ墓地に埋葬された。ここはアンカラに来た東

⁽²⁰⁾ *Siyasi Hayatim* には、「1949年9月18日、家族や私についてきてくれた人々とともに、ウルムチから出発。エイサが後から一部の人たちを連れて出発し、9月20日夜、ブグルで合流。この時は合わせて80人位だった。9月28日にカシュガルに到着した」とある。

トルキスタン人が訪問する聖地のようにになっている。

(3) 『東トルキスタン史』について

この歴史書は、ムハンマド・イミンがアフガニスタンの首都カーブルで亡命生活をしてきた時期に行った研究成果で、脱稿したのは1940年だ。

執筆にあたって参考とした資料についてはメモ書きがあり、その一覧は1998年版前書部分（17～18頁）に掲載した。内訳はアラビア語、ペルシャ語、英語、ウルドゥー語、ロシア語からペルシャ語に、フランス語からトルコ語に、英語からペルシャ語に、英語からトルコ語に訳された書籍など、様々だ。

1940年に脱稿した原稿は、翌1941年にインド領カシミールの「東トルキスタン移民協力協会」に送られ、協会責任者メットカシム・ハジが出版費用を集めて、当地で油印出版されることになった。当時ムハンマド・イミンが身を寄せていたアフガニスタンは、政治的制約から『東トルキスタン史』を出版できる環境ではなかったが、カシミールは比較的自由にウイグル人居留民が多く、出版の経済援助を申し出る者がおり、印刷技術もあったため、原稿を人に頼んでカシミールまで持って行かせたわけだ。なお、この時ムハンマド・イミンは、カシミールには行ってない。ところが、すぐに出版とはいかなかった。原稿の中のホージャ・ニヤズの評価を巡って、同胞から批判されたのだ。義父は、「ホージャ・ニヤズらは停戦交渉に応じるべきではなかった。それが1933年革命の失敗に繋がった」と怒っている。しかし、「その選択は避けられなかった」とホージャ・ニヤズを擁護する声も多く、「そのまま出版してよいものか」と論争になった。戦後1947年になってやっと最初の『東トルキスタン史』が発行された。印刷部数は300冊。表紙は白。同志間の無用な諍いを避けるため、革命史部分は印刷されなかった。

1947年、カシミールからムハンマド・イミンの手元に届けられた『東トルキスタン史』は、1冊だけだった。義父はその出来に落胆し、次のような不満を述べている。「印刷ミスが非常に多い。冒頭部分に書いた附記、及び後半部分である1930年から1934年の革命部分と盛世才時代が一切カットされていた。必要な地図や写真が入ってない。幾つかの場所に勝手な書き換えがあった」。1947年版は海外在住者の元にだけ届き、国内に入ってきた書籍はほとんどなく、東トルキスタンの民がこの本を読めないこと。ここ数年で新たに入手した資料から新事実や修正すべき誤りを見つけたこと。より質の高い歴史書にしたいこと。それらを理由に、義父は1948年、アルタイ出版社から完全版を出版しようと計画した。1948年6月段階で、100頁ぐらい印刷されていたと聞かすが、政局の変化や亡命のため、頓挫した。なお、「なぜ2度目の出版が必要なのか」を義父が記した文章が存在する。これも1998年版前書（15

頁)に入れている。

1947年頃、ウルムチの義父のオフィスに、トルコの歴史研究機関から『東トルキスタン史』をトルコ語で出版したい」との手紙が来たが、これも実現しないで終わった。

1971年に出版された手書きの油印本『東トルキスタン民族革命』は、1940年脱稿原稿のうち、1947年発行本で削除された後半部分、つまり比較的新しい時代の革命史にあたる記述のみを出版したものだ。ムハンマド・イミンの死後、カシミールでメットカシム・ハジによって印刷出版された。出版費用を出したのは、ウイグル商人でメッカに巡礼に行つてサウジアラビアに定住したカラカシ・イラジだ。発行部数は600冊。原稿をもとに、アラビア文字を美しく書ける人物に依頼して写してもらったのだが、その人はウイグル語が全く分からなかったので、文章の意味は理解しておらず、写し間違いが大変多い。地図や写真も掲載されなかった。表紙は黄色。

1987年トルコのアンカラで、義父の脱稿原稿全部を現代ウイグル語表記に書き換え、活字印刷して出版した。カシミールで出版した2冊の合併本のような形の『東トルキスタン史』は、直筆ノートと同じ緑色のハードカバーで、装幀はカシミール版に比べて格段に良くなった。発行部数は2000。ファティマが発行人となり序文を添え、私(注:ユヌス)の実弟で医者でムハンマド・ヤクブ・ボグラが「現代ウイグル語」⁽²¹⁾になおし、全文ユヌスとヤクブが「訂正」の手を入れた。カラー地図は義父自身が書いたもの。それ以外の白黒地図や写真は、新たに加えたものだ。ズヌン・ハジが、出版経費20000ドルを出してくれた。

1991年カザフスタンのアルマアタで、歴史家バートル・ラシディンがキリル文字に書き換えた『東トルキスタン史』を出版したが、私たち夫婦は現物をみておらず、発行部数も知らない。

1998年トルコのアンカラで、前回の1987年版よりも更に多くの箇所を「修正」した、現代ウイグル語表記の活字版を出版した。発行部数は2000で青いハードカバー。

修正箇所は、例えば、義父の原稿には「東トルキスタンの北方では、キリスト教が伝播していた」との記述があるが、私はその根拠がよく分からないので「伝播していない」と手を入れて、変えてしまった⁽²²⁾。

私は定年退職後、写真や手紙、原稿や政治文書など、義父に関する資料を収集し、2007年に資料集をDVDで個人発行した⁽²³⁾。

⁽²¹⁾ 厳密には、現代中国で使われている現代ウイグル語とは、言葉も文字も正書法も異なる。

⁽²²⁾ この証言から、1998年版はオリジナル原稿からの改変が随所に見受けられるため、「ユヌス&ヤクブによる改訂版」と位置づけた方がよいかもしれない。

⁽²³⁾ Mehmet Emin Buğra Kulliyati. ユヌス等の作成した目録には制作2003年とあるが、編集を重ねて完全版を実際に配布したのは、2005年になってからだという。

聞き取りを終えて

ユヌス・ボグラ証言から新たに分かったことは、「はじめに」部分で紹介した清水由里子がまさに指摘したとおり、ムハンマド・イミン・ボグラ直筆原稿そのままの『東トルキスタン史』は、現在に至るまで出版されていないこと。この直筆原稿は、歴史研究に於いて非常に貴重であることであろう。

御高齢で耳の遠いユヌス氏と、トルコ語が全く出来ない筆者との対話は、実に大変であった。その後、何度も電話やメールで問い合わせ、拙稿が完成した。

病院を退院したばかりのお宅に押し掛け、1日ばかりになった口述収集に、嫌な顔一つせずお付き合いくださったユヌス氏、ポロ（ウイグル風ピラフ）を振る舞って下さったファティマ女史に、心から感謝申し上げたい。

（中央大学非常勤講師）